追憶
地球を発つ恋人へ
そんなに遠くへいけば
あなたは　わたしのことを忘れるわ
そんなに長い時間がたてば
あなたは　わたしのことを忘れるわ
だからいかないで　ここにいて
だからいかないで　ここにいて

帰郷

帰ってきたのだけれど
だれも迎えてくれるものはいません
帰ってきたのだけれど
わたしを待つといってくれた
少女はもういません
野辺には白い花ばかり
少女の墓すら見えません
わたしの家も少女の家も
花の中にうずもれて
野辺には風の音ばかり

わたしは帰ってきたのです
遠いきらめく宇宙から
緑と風のふるさとへ
それなのにこの世界には
本当にだれもいないのです

思い出ばかりが草の間をかけぬけてゆきます

船出
もちろんあなたは知りゃしない
(やさしかった人)
こういうことはむかしからくりかえされてきた
別れるために のがれるために
さがすために 忘れるために
船出した多くの少年の魂をもつ者どもよ
もちろんあなたは知りゃしない
ぼくの思いも眠れぬ夜も
ぼくにはほんの少しの勇気が必要なだけ
星ぼしへ向かう
ああ 知りゃしない
そこかしこれほど深い気流の中か
これほど多くの次元の中か
夜ごと夜ごと星ぼしを追って
あなたを見るぼくの夢が
影のように 宇宙を渡るか
白雲と青空は幽の星ぼしになり
潮風は宇宙気流となり
波頭が分解するイオンになったとて
何にかわりがあろう 帆に夢をはらんで
昔 太洋を渡った船と
この銀色の宇宙船と
思いはいつも変わらない
いつものときも同じように
ぼくは船出をしたのだ

恋人へ
そんなに
遠い宇宙のはてで
わたしはあなたに手紙をかきます
またわたしを　待っていてくれていますか　と
またわたしを　愛してくれていますか　と
でもわたしは　おそらく帰れない
この手紙も　あなたのもとへはとどかない
青い通信筒にいれてあなたの住所を
かくつもりですか
もうあなたのいる地球へゆく船は出ないのです
残された時間もわずかです
どうぞ　わたしを忘れてだれかと
幸福な結婚をしてください
そしてしあわせになってください
でも　いっときにはわたしを忘れないでください
それからわたしを思い出の中へ葬り去ってください
あなたをとても愛していた
もう地球へ出る船はないのです

別れ

ぼくの父は
船乗りだったと　母がいっていました
遠い星ぼしへ船出したきり
帰ってこなかったと
母は未婚の婦人になり
ぼくを産んで育てましたが
ぼくが船乗りになる決心をしたときに
はじめて父のことを話してくれました
　もう死んでしまったに
　ちがいない　と　歌うように
でもぼくは　おかしな話だけど
どこかに　ぼくに似ているという
ぼくの父が生きてる気がしてならない

ぼくが出立する日　母は
どうして二度もこのように
別れなければならないのか　と
　泣きました
ぼくは別れにはならない
なぜならきっと帰ってくるからと
約束しました
きっと帰るつもりです

手紙
その青い通信筒は　その星の
すっかり荒れはててしまった
ドームの床下にありました
あなたの名と
あなたの住所がかかれてありました
悪い病気と不運な事故が
彼らをその星に孤立させてしまったのです
長い長い静寂の訪れ
おかあさん
おとうさんが宇宙から出した
あなたあての手紙です
おかあさん
あなたの石碑の下　草の下に
この通信筒を埋めます
おとうさんからの手紙です

追憶
あなたがわたしを見かけたら
わたしのことを思い出しておくれ
わたしのために墓碑を
建てておくれ
わたしのことを
語っておくれ
そうして
幾千の
星ぼしの谷間に
わたしはひとりで
眠るだろう
たったひとりで
夢見るだろう
百の語り
千の語りを
すべて
追憶のうちに
《おわり》
ララ　1976年9月号に掲載